

歴史文化資源の活用と地域活性化に関する研究

—朝鮮通信使関連遺跡の活用事例を中心に—

権 俸基*

A Study on the Local Revitalization Utilizing Historical and Cultural Resources

KWON Bong Ki*

要旨

近年、日本各地において地域が持つ様々な歴史的資源の世界遺産への登録が積極的に進められている。その本来の目的は勿論、当該地域における地域観光振興などを含む地域活性化を考慮した活動である。本稿では、日本の国際交流において歴史的意義を持つ「朝鮮通信使」¹⁾の日本往来に様々な関係を持つゆかりの地を対象として、そのような朝鮮通信使と関連した歴史文化資源をどのように地域活性化に活用しているのかを概観してみた。その結果、各地域に賦存している文化資源の特徴によって、また、その地域における他の文化資源との比較によって、様々な形で活用されていることが確認できた。また、その結果を踏まえて、今後、より効果的な活用のための以下のような提言を行った。即ち、①それぞれの地域が共有している同じ文化資源の意義付けや広報において協力し、尚かつ各地の個性を見出す必要があるため、協議会による活動の強化が望まれる。②情報化の進展に合わせて、情報発信においても協力による広報効果を高めながら、各地の個性的な魅力を際立たせるための総合的な情報発信組織を設立することが必要である。③観光振興のためには、潜在的な観光客に対応できる記念碑や専用施設等を整備し、可視的広報効果を高める必要がある。

[キーワード]

歴史文化資源、朝鮮通信使、地域活性化、地域観光、地域連携、

1 はじめに

*広島文化学園大学大学院 社会情報研究科

Graduate School of Social Information Science, Hiroshima Bunka Gakuen University

現在日本国内では、地域観光振興による地域経済の活性化を目的とする様々な試みが各地において行われている。特に「観光立国」を前面に掲げた政府の地域振興・地域創生政策の後押しもあり、従来の「まちおこし」は、より具体的な「地域観光振興」の形で推進されている現状である。また、そのための各地域の特産物の開発や地域の観光地の整備と共に、より広い意味での地域の魅力探しの一環として、その地域に賦存する歴史的文化資源が一層注目されるようになった。

本稿では、歴史的文化資源といえる「朝鮮通信使」の寄港地と関連する様々な文化資源に対して、呉市下蒲刈町をはじめ、国内の他の朝鮮通信使ゆかりの地における朝鮮通信使関連文化資源の活用状況を概観することによって、今後の歴史文化資源を活用した地域活性化における、より有効な取り組みを模索してみたい。そして、このような共通する地域文化資源を持つ地域が、今後、その資源をより効果的に地域観光振興に活用していくための若干の提言を行いたい。

2 呉市下蒲刈町の朝鮮通信使関連の文化資源とその活用

朝鮮通信使の寄港地として知られている下蒲刈一帯の地域は、古くから瀬戸内海の海上交通の要所として栄えてきた場所である。江戸時代には、朝鮮通信使がこの下蒲刈の地に11回立ち寄った歴史と伝統を持つ。下蒲刈町の現在の鮮通信使関連遺跡としては、三ノ瀬御本陣跡（写真2-1）や、三ノ瀬朝鮮通信使宿館跡（写真2-2）、通信使が上陸した雁木（写真2-3）等がある。尚、三ノ瀬御本陣跡と三ノ瀬朝鮮通信使宿館跡は、現存する構造物なく、「跡」として広島県の史跡に指定されているものである。

写真2-1



通信使の宿館として使われた三ノ瀬御本陣跡

写真2-2



通信使の正使の宿泊施設であった三ノ瀬朝鮮通信使宿館跡

写真2-3



朝鮮通信使が上陸した雁木

下蒲刈町には、朝鮮通信使資料館がある。この資料館は、通称「御馳走一番館」と言い、町内の松濤園ⁱⁱ（写真2－4）の中にある。資料館内には、朝鮮通信使来日当時の豪華な接待膳を忠実に復元した展示（写真2－5）や、通信使の行列を配したジオラマ模型、当時の通信使を再現した等身大の人形（写真2－6）、更には朝鮮通信使船の模型、各種の絵画・資料などが多数展示されている。

特に、下蒲刈町の朝鮮通信使資料館は、国内の他の朝鮮通信使ゆかりの地と比べて、独立した資料館としてよく整備されており、朝鮮通信使関連の資料展示の充実と共に、最も整備された施設と環境を有していると言える。

写真2－4



朝鮮通信使資料館がある松濤園

写真2－5



館内に展示された饗応料理の模型

写真2－6



館内に展示されている通信使人形

写真2－7



通信使が来日した時代の雰囲気整備された資料館一帯（松濤園パンフレットより）

これらのことから、下蒲刈町の特徴としては、当時のものとして現存する歴史的遺跡は多くないが、近年、積極的な関連施設の整備とともに、朝鮮通信使関連の資料の収集と展示が大変充実していることがあげられる。また、現地の景観が当時の歴史的物事を連想させるように整備されていることも大変優れている点である（写真2－7）。そして下蒲刈町は、朝鮮通信使行列の再現にも力を入れ、10回を超えた現在では、地域を代表するイベントとして定着している。

しかし、問題点としては、景観や設備は整えられているものの、朝鮮通信使を直接関連

付けるような象徴的な建造物（朝鮮通信使を前面に出した看板や記念碑等）が無く、訪問者の視覚に直接入りにくい状態である。また、当地域の地理的なアクセス面での不利点を考慮しても、他地域に比べ最も注目されるべき「朝鮮通信使資料館」の充実した展示内容や伝統ある再現行列の一般の人々への認知度はそれほど高くないことがあげられる。

従って、下蒲刈町の地域観光振興において、今後更なる朝鮮通信使資料館の活用を期待するためには、下蒲刈町に対する認知度の向上と視覚的な広報効果が得られる施設の整備が鍵と言える。

3 他地域の朝鮮通信使関連文化資源の活用事例

これまで下蒲刈町について見てきたが、以下では、下蒲刈町と同様に朝鮮通信使ゆかりの地としての文化資源を持つ他の地域について、同様の歴史文化資源の活用におけるその現状と特徴をまとめてみる。

1) 福山市鞆の浦町

鞆の浦町の特徴としては、福禅寺（写真3-1-1）のような朝鮮通信使が実際に宿泊したとされる宿所や、通信使直筆の看板が現存していることがあげられる。そして、ここでは、当時の使節団が「この宿所から眺めた景色」を「日東第一形勝」と称賛したという素晴らしい風景が、今でも時代を超えて味わうことができる。また、その内容を看板として掲げることで、当時の雰囲気と魅力を訪問者に伝えている（写真3-1-2）。

鞆の浦という地域は、朝鮮通信使の他にも、映画の舞台となった場所として全国的に注目される地域の魅力を持っているが、それに加えて、姉妹都市との交流で行う朝鮮通信使再現行列や、朝鮮通信使ゆかりの場所を活用した展示会・日韓交流イベントを定期的に行い、鞆の浦地域の活性化の一環として「朝鮮通信使」を積極的に活用している。

写真3-1-1



通信使が宿泊した福禅寺と、そのことを伝える建て看板

写真3-1-2



通信使が「日東第一形勝」と称賛した福禅寺対潮桜からの眺め

2) 瀬戸内市牛窓町

岡山県の瀬戸内市に位置する牛窓町の特徴は、地域の古い建物を活用して、朝鮮通信使の資料館を設置していることである。この施設は、「海遊文化館」という名前であるが（写真3-2-1）、設置されている看板からもわかるように、朝鮮通信使の資料館であることを前面に押し出している（写真3-2-2）。館内の展示においても朝鮮通信使を全体的に理解できる内容となっている。（写真3-2-3、写真3-2-4）

写真3-2-1



牛窓の朝鮮通信使資料館である海遊文化館

写真3-2-2



朝鮮通信使資料館の看板

写真3-2-3



朝鮮通信使資料館館内

写真3-2-4



館内に展示されている唐子踊りの人形

写真3-2-5



通信使の宿所となった本蓮寺入口

写真3-2-6



通信使の宿館として使用された本蓮寺の境内

写真 3-2-7



著名な人物の記事を活用した瀬戸内牛窓観光ポータルサイト
(<http://www.welcomoo.net/>)

のポータルサイトにて小泉元首相の発言を引用した情報を発信)を活用するなど(写真3-2-7)、ゆかりの地としての立場を地域の魅力として伝える積極的な工夫が伺える。

3) 近江八幡市

滋賀県の近江八幡市は、古くから商人の町として、また、日本全国で城の密度がもっとも高い地域として知られる大変有名な観光地である。そして、この地域もまた、朝鮮通信使が通過したゆかりの地である。ここでは、近江八幡市立資料館にて朝鮮通信使関連資料の展示スペースを設け(写真3-3-3)、通信使の瓦人形(写真3-3-5)や行列の模型(写真3-3-6)、また、饗応料理の模型(写真3-3-4)等を展示しており、地域の歴史文化遺産として活用されている。

写真 3-3-1



「朝鮮通信使街道」に建つ碑石

写真 3-3-2



通信使行列が通った「朝鮮通信使街道」

そして、この資料館の近くには、通信使の宿所として実際に使用された本蓮寺の境内も残されている。(写真3-2-5、写真3-2-6)

また、この地域の朝鮮通信使ゆかりの地としての最大の特徴は、江戸時代より伝わる「唐子踊り」の伝承である。これは、牛窓町の神社で神事として奉納される稚児舞いの童子対舞で、その装束は、円錐形の帽子に上着、だぶついたズボンをはいている。ズボンは朝鮮のパジそのもので、帽子も当時の朝鮮通信使の被り物にとってもよく似ていることから、朝鮮通信使との歴史的文化的な関係がその当時から現在まで脈々と受け継がれていると言える。

また、現地への交通アクセスにおいては、決して便利とは言えない地理的条件ではあるが、広報において、朝鮮通信使に関連付けて著名な人物の記事(地域観光

この地域は、他の朝鮮通信使ゆかりの地域と比べると、当時の朝鮮通信使関連遺跡や資料の展示規模等において、優れているとは言いがたい。しかし、朝鮮通信使一行が通ったといわれる街道を「朝鮮通信使街道」として石碑を設置するなど、積極的に地域の観光文化遺産として活用している（写真3-3-1、写真3-3-2）。特に、インターネット上での広報において、朝鮮通信使に関連する基本的な説明が充実しており、「朝鮮人街道」の街としてよく知られている。そして、このことは、地域の大きな魅力として潜在的な観光客に訴えるものとなっている。

写真3-3-3



通信使街道沿いの近江八幡市立資料館

写真3-3-4



資料館内の展示（朝鮮通信使の饗応料理の模型）

写真3-3-5



資料館内の展示
（朝鮮通信使瓦人形）

写真3-3-6



資料館内の展示（行列を表した朝鮮通信使人形）

4) 大阪・京都

大阪と京都は、朝鮮通信使の日本での旅程において、大変重要な場所である。大阪は、朝鮮通信使一行が釜山を出た後、玄界灘から対馬藩の案内で対馬・壱岐を経て、瀬戸内海を通過してたどり着いた海路の終点であり、大阪の九条島は、船を御座船に乗り換え淀川をさかのぼって京都へ行く拠点でもあった。また、京都は、朝鮮通信使の陸路での移動の始

まりの地点で、ここから江戸を目指した。

現在大阪の朝鮮通信使が着いたとされる場所には、これといった遺跡は残されておらず、近年になって建てられた記念碑（朝鮮通信使の碑）がある程度である（写真3-4-1）。また、京都には、当時数多くの朝鮮通信使の宿所として使われたといわれる場所があり、以前は、これらのゆかりの地とされる場所に、朝鮮通信使との関わりを説明する立札が設置される等（2008年10月）、歴史的な出来事を地域の文化資源として活用する試みが成されたこともあった。しかし、現在ではその立札も見当たらなくなっており（2015年1月）（写真3-4-2、写真3-4-3）、新たに朝鮮通信使ゆかりの地としての魅力を地域の文化資源として積極的に活用しようとする傾向は高く感じられない。

勿論、現在の大阪と京都は、日本を代表する世界的な観光都市であり、それぞれが持つ魅力や、活用できる歴史文化遺産は十分であることを認めざるを得ない。即ち、京都や大阪は、朝鮮通信使のゆかりの地として、大変重要な都市であったにも関わらず、その歴史的資産が前面に出ていない理由としては、他に活用できるものが多くあるために朝鮮通信使関連遺跡の積極的な活用が必要とされないからであると理解できよう。

写真3-4-1



九条島の朝鮮通信使の碑

写真3-4-2



通信使ゆかりの地の立札（2008年）

※京都市情報館ホームページ

(<http://www.city.kyoto.lg.jp/>)

写真3-4-3



2015年現在、立札はなくなっている

5) 対馬

対馬は、朝鮮通信使において、大変特別かつ最も重要な場所である。朝鮮との交流の中心的な役割を果たしてきた対馬は、300年以上続いた朝鮮通信使の往来において、その案内役としてまた、日本と朝鮮との外交において大変重要な役割を果たしてきた。現在でもNPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会ⁱⁱⁱの事務局が置かれており、朝鮮通信使に関連する遺産の保存と継承に力を入れている。

現在対馬は、韓国から距離的に最も近い日本として、釜山から毎日のように大勢の観光客が訪れる観光名所にもなっており、このような地理的有利な立地を積極的に活用した地域の整備と積極的な観光振興に取り組んでいる。

しかし、現在の対馬市は、朝鮮通信使との関わりが最も深かったにもかかわらず、長崎県立対馬歴史民俗資料館（写真3-5-1）に展示されている朝鮮通信使関連の資料や展示物では、他の朝鮮通信使ゆかりの地域に比べて際立って充実しているとはいえない状況である。

対馬は、通信使だけでなく、豊臣秀吉の朝鮮出兵の地でもあり、明治期から第2次大戦期までの間には、要塞が築かれ、国防の最前線の地でもあったことから、それらに関する遺跡も数多く、平和的交流とは違ったイメージの一面も併せ持つ場所である。

現在対馬では、当時の藩主であった宗家の外交文書を含む「対馬宗家文書」を郷土の歴史的な重要遺産として整備し、活用している。そして、対馬の歴史上の出来事をうまく再発見させ、それぞれの遺跡や記録に関連付けることによって、島全体を歴史的な意味で紹介する多様な観光モデルコースを提供している。特に、対馬の郷土の歴史を朝鮮との交流に照らし合わせる努力が様々な形で成されていることが特徴的である。例えば、遣新羅使の歌碑を整備し、観光客に紹介することや、韓国では悲運の王女として知られている朝鮮国王高宗の娘・徳恵姫が、旧対馬藩主・宗家当主である宗武志伯爵のもとへ嫁いだことを記念した碑（写真3-5-2）や「朝鮮国通信使の碑」（写真3-5-3）を建立し、歴史的事実を残していること。また、通信使との交流に尽力した雨森芳洲の墓の整備などである（写真3-5-4）。

写真3-5-1



長崎県立対馬歴史民俗資料館

写真3-5-2



対馬藩の宗武志公と朝鮮王国の王女の結婚を祝した記念碑

写真 3-5-3



朝鮮国通信使の碑

写真 3-5-4



朝鮮との通交実務に尽力した雨森芳州の墓

また、日本最初の寺とされる対馬の梅林寺の紹介において、百済の聖明王から欽明天皇に献呈された仏像を仮置きするために建立されたことを前面に押し出していることなどからも、その活用へ積極的な取り組みが伺える。

そして、観光客向けの広報や案内にも力を入れ、大きな壁画（写真 3-5-5）や看板の設置（写真 3-5-6）、大型の記念碑の設置（写真 3-5-3）など、訪問者に視覚的な印象を強く与える広報にも配慮していることが印象的である。

写真 3-5-5



朝鮮通信使対馬易地聘礼 200 周年壁画

写真 3-5-6



朝鮮通信使の島をアピールする厳原町の看板

4 地域活性化への各地域の歴史文化資源活用における特徴と課題

これまで、呉市下蒲刈町をはじめ、各地域の歴史文化資源の地域活性化への活用の特徴を概観してみた。その結果、各地域は、地域の地理的、歴史的状況に応じて、また、地域

に賦存するその他の文化資源を考慮して、その地域の活性化や観光振興に役立てていることが分かった。即ち、同一の歴史文化資源の活用においても、地域によって様々な異なるパターンがあることが分かった。特に、大阪や京都の事例のように、現在、積極的な取り組みを行っていない場合にも、今後のその活用のために、地域の歴史文化資源を風化させないように適切な継承と整備が必要だと言えよう。なぜならば、歴史文化資源は時間と共に風化しやすいが、その地域の他の観光資源と地域の魅力を高める上で、お互いに競合せず、活用の方法によっては、相乗効果が期待できると言えるからである。そのような一つの事例が対馬の場合と言えよう。

対馬の場合、多くの韓国からの観光客は、朝鮮通信使ゆかりの地への観光として対馬を訪れるのではない。対馬への主な観光要因は、最も近い外国であり、その豊かな自然であるといわれている。しかし、一度対馬を訪問した韓国人観光客は、対馬が持っている朝鮮通信使との歴史的な深い関係に改めて気づくようになり、対馬に対するさらなる魅力と再訪問の動機を持つようになる。そしてさらに、そのような対馬観光経験者のイメージは、大きな広報効果を生み、今後、対馬の歴史文化資源の体験を目的とする多くの新しい観光客を誘引する結果となるであろう。

特に、2014 年からは、日本の「朝鮮通信使」ゆかりの自治体などでつくる協議会が韓国側と協力し、朝鮮通信使関係史料の記憶遺産登録を 2016 年に国連教育科学文化機関（ユネスコ）へ申請し、2017 年の登録を目指している。このような活動によって、今後、朝鮮通信使と関連した様々な歴史的資源の活用は、ますます効果的な地域活性化の一つの要素となっていくと思われる。

5 まとめと活用における提言

各地域が持つ共通の歴史文化資源の活用において概観した結果、現在取り組んでいるそれぞれの特徴的活用に加え、現在の社会的変化を考慮した、より効果的ないくつかの提言をまとめたい。

まず、上述したように、朝鮮通信使関係史料のユネスコ記憶遺産への登録活動から見られるように、各地域間の連携がより効果的に行われるべきであろう。即ち、同一のテーマとも言える朝鮮通信使の中でも、各地域が最も差別化できる得意な分野やイベントを見つけ、それぞれの特徴をもっと際立たせる努力が必要である。そしてそのためには、「NPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会」のような団体での組織的な協議と協力が必要である。

また、インターネット時代の進展に合わせて、それぞれの地域の特徴と魅力が差別化された情報発信と、潜在的な観光客への具体的な対応が必要と思われる。例えば、現在の観光客や地域観光において注目されている SNS 世代への対応を考え、視覚的な効果が強調できる画像や映像としての伝播、情報の拡散を視野に入れた広報に効果的な象徴物（記念碑や案内塔、壁画）の設置、建造である。

最後に、「朝鮮通信使」のゆかりの地としての魅力について、インターネット上で統合された情報を連携して発信することによって、各地域が個別に行う情報発信よりも、より強いメッセージやイメージを与える必要がある。そして、広報のみならず、実質的な地域観光における連携事業を実施することによって（スタンプラリーや姉妹施設制度による割引特典、共通パンフレットの発行等）、他地域との相互振興効果を図ることにも取り組むべきである。

注

i 朝鮮通信使は、将軍の就任祝いなどのため来日した 300～500 人規模の外交使節団。起源は室町時代にさかのぼるが、江戸時代以前には 5 回、江戸時代には 1607 年から 1811 年までの約 200 年間に 12 回来日した。江戸時代の来訪は、徳川家康の意思に基づいて実施され、日本と朝鮮の相互の信頼を確認する外交であり、貿易的側面も持っていた。また、使節団には学者や文人、医師なども含まれ、国際文化交流の意味においても日本文化に影響を与えた。

ii 松濤園は、下蒲刈町の全島庭園化事業「ガーデンアイランド構想」の一環として島内の三ノ瀬地区に整備された施設であり、地域の観光振興や活性化の中核となっている。そしてその中には、歴史的な伝統と文化を活用した朝鮮通信使資料館（御馳走一番館）がある。この資料館を含めた松濤園には、下蒲刈町の観光の中心地として、年間を通して観光客が訪れている。

iii 朝鮮通信使縁地連絡協議会は、対馬市を事務局とし、日光市、静岡市、大垣市、長浜市、近江八幡市、彦根市、京都市、神戸市兵庫区、たつの市、瀬戸内市、福山市、呉市、上関町、下関市、新宮町、壱岐市の「朝鮮通信使」ゆかりの自治体と関係団体、個人により構成されている協議会で、現在の会長は対馬市長。

参考文献

1. 柴村敬次郎「朝鮮通信使と蒲刈」 1977, 下蒲刈町
2. 日韓共通歴史教材制作チーム編集「日韓共通歴史教材 朝鮮通信使」2005, 明石書店
3. 仲尾 宏「朝鮮通信使の足跡」2011, 明石書店
4. 権俸基「歴史文化遺産の再評価と地域観光の振興」,『社会情報学研究 Vol.17』, 2011, 広島文化学園大学
5. エネルギア総合研究所 「朝鮮通信使に関するアンケート調査について」, エネルギア地域経済レポート No.463, 2013, 中国電力（株）